岩手県の境あたりによ、五頭野っていう野あってあったどよ。そこにあまりきつねえで、歩く人どこ化かしたりするので、そこで、きつね狩りするどて、立て札立てだんだとよ。そしてその日になってこんだ、ほうぼうの人たち、きつね狩りにきたんだとよ。ガンガンただいたり、鳴らしたりして、きつねぼったごでエよ。

その手前に、三右エ門という人、えであったんだど。三右エ門のどこさ、きつねはせごんで行ったんだど。やせきつね入ってきたもんだから、

「ふとごろさ入ってきたものだば、殺されね」

どて、かぐしたんだど。そしたどこで、助けてやったば、後から三右エ門たねで、そのきつね、

「助けられでえがった」

どって、礼に来たもんだけどよ。そしてこんだ、

「きつね、なんぼになったア」

って聞いだば、たいした古しいきつねであったんだど。それでしゃ、

「阿倍貞任の戦いおべったがア」

と三右エ門聞いだば、おべったって言うんだとよ。

「んだらばしゃ、恩返しにそれやって見せる」

どて、それから三日の後に、ここさ来てけれと約束したど。

その日になってみだば、その五頭野っていうところは、たいもんな人であったもんだど、ちゃんと場所とって見てだども、なかなかそのきつね、あらわれでこねんだど。

「ダメだな」

と思ってたどこさ、そのきつね、二、三匹で来たもんだけどよ。

そしたどこで、そのきつねはな、叫ぶのだけどよ。

「西の方をごらんなさい」

ったば、たいした山、ではったものだけど。そしてこんだ。

「東の方をごらんないし」

ったば、どこまでも広い、青々とした、海ではったもんだど。

それで、

「たいした技術のあるきつねだ」

どて、みんな感心したもんだけど。

そしたどこさ、鎧、兜をつけ、昔のいくさする侍出てきて、大将馬さ乗り、家来たちは歩いて、弓矢たないで、いっぱい出てきたもんだけど。阿倍貞任の方だもんだど。

こっちの方まだ、八幡太郎は馬さ乗り、家来いっぱいつれで、来たもんだど。それから、いくさはじめたもんだど。そしたところで、八幡太郎が馬の上から弓いったば、相手の大将の首筋さ当たったんだとよ。それで、大将は馬からさかさまに落ちてしまったもんだど。見てた人たちまだ、

「わあ、仕方ねエ、仕方ねエ。ナンマイダー」

って言ったばよ、きつねの術あ消えでしまって、なんも見えなぐなってしまったど。

あとはとっぴんばらりのぷう。